漢文教材による課題解決学習の試み

秋元達也

一　はじめに

学校週五日制度が俄かに現実味をおびてきた。平成四年九月からの第二土曜日の休業日設定以来、全ての学校においては（特に教育課程の面において）大きな課題を抱え込んだことになる。とりわけ大学進学を主な目標とするいわゆる「進学校」では、新指導要領の問題もからみ、大学入試にいかに対応するか、なによりも私立高校に学力面において大きく差をつけられるのではないかという懸念で一杯なのではなかろうか。

このような状況の中で、授業者としてのわたくしたちの課題は、限られた時間の中でいかにして学力の維持・伸長を図るかという方法論的な問題になろう。一クラスの国語の授業が年間およそ三〇～五〇時間減少するであろう来年度以降も、求められる学力の質は（大学入試の内容に大きな変革が起こらない限りは）変わらない。わたくしたちはこの事態に対し、新たな授業観、教材観をもって臨む必要があるはずである。そうしなければ、そこには極度な詰め込みと教師・生徒両者の過度の負担しか見えてこない（しかし現実的にはそれが大勢である感は否めない）。それではいかなる方策が考えられるのか。これが今回わたくしがこの授業を試みた要因である。

二　基本的な考え方

今回の試みにおいて、わたくしは次の二点に留意し、授業を構成した。

①　課題解決学習

授業時数減少の中で、学力育成のために一番重要なことは、学習者に今以上に主体的に授業に参加しようとする意識を持たせることであろう。受け手としての参加でなく、主体として参加させるためには、まず現在中心的な授業方法として用いられている講義を主体とした授業からの思い

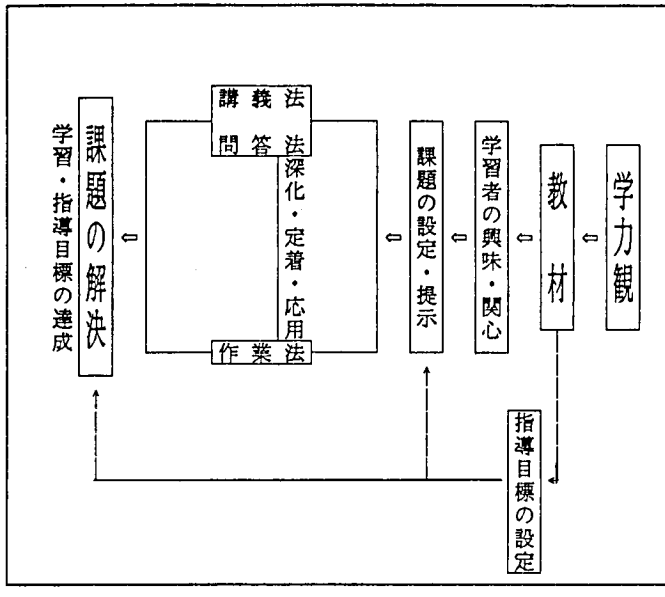
切った方向転換が求められるのではないか。しかしながら生徒の自主性や興味・関心を尊重すればするほど、学力育成という観点は薄れてしまう危険性もはらんでいる。養うべき力は確実に育成し、かつ学習者を主体とした学習方法となると、やはり課題解決学習が最も効果的であるように思われる。

② 各種言語能力を実際に使用する場の設定

少ない授業時数の中で現在と同じレベルの学力の育成を図るためには、結論から言えば、一時間の授業内容の密度を濃くする以外に方法はない。しかし先に述べたように、それが「詰め込み」を意味するものであれば全く意義はないと考える。

諸言語能力は、それを具体的に活用（＝応用）してはじめて、そして最も効果的に身につくものであり（それゆえ徹底したドリル学習も成立するのであるが、本論の趣旨と異なり、また詰め込みを肯定することにもなるので言及しない）、それは幼児も高校生もかわらないと考えている。しかし現実的には、現代の高校生の言語生活に、授業内容と同等の高いレベルの討論や表現を求めることは難しい。やはり授業内で行われるべきことであろう。そのための方法が作業法である。わたくしたちはもう少し作業法の効用を信頼し、自らの授業の中に積極的に取り入れていくべきなのではないか。同時に、作業の過程で、教科書には出て

・「基本的な考え方」模式図



こない新たな語彙や観点、思考方法と出会い、プラスαの力をつけることも十分に予想され得ることである。

ただ、これは従来からの行き方を捨て、作業法のみに固執せよということではない。作業法のみならず講義法も問答法もそれぞれの役割りがあり、またあらゆる学習活動は、学習・指導目標に即したものでなければならない。従って言語作業には目標達成のための一つの効果的な方法であり①で述べた学習課題解決のためという必然性が要求される。課題解決というひとつのテーマに全ての学習活動が集約される、そのような授業構成が必要とされるのは言うまでもない。(前頁図参照。)

三　単元の具体的内容

1. 単元名「『桃花源記』(東晋・陶潛)を読む」
2. 対象　鹿児島県立出水高等学校一年五・六・七組
3. 指導時期　平成五年一～二月(全七時間)
4. 指導目標
   ① 作品を正確に解釈させ、漢文読解の基礎力を養わせる。
   ② 多くの文献に触れさせることにより、漢文のみならず、他の分野の読解力も養わせる。
   ③ 研究内容を表現させることにより、論理的文章を書く基礎力を養わせる。
   ④ できるだけ多くの語彙に出会わせる。
   ⑤ 作品研究の態度・方法を学ばせる。
5. 学習目標
   ・『桃花源記』を読み、その課程で提示された五つの疑問・課題について研究し解決する。
6. 授業内容

授業内容は大きく二つの内容に分かれる。前半は『桃花源記』自体の解釈・読解であり、指導目標①はここを中心とした目標である(4／7時)。教科書(三省同『国語Ⅰ三訂版』)では四段落に分けて掲載されているので、一時間一段落の配分で授業を進めた。用いた方法は講義及び問答法であったが、生徒が事前に提出した感想を適宜紹介しながら進めることにより、受け身になるのを避けた。その

		指導内容	指導上の留意点
1	導入	・前時の内容の確認	・指名読み一人、及び指導者の解説による。
2	展開	・第二段の読解 ①範読の通読 ②内容のおおまかな把握 ③通釈 ④村の様子をまとめさせる ⑤課題①を提示	・範読後、指名読み一人 ・主人公の行動を描いている部分と、村の様子を描いている部分に分けさせる ・指導する語句・句法は若、縱、悉、如。なお若と如の関連性にも触れる。 ・生徒意見を板書、整理 ・課題①にかかわる感想を紹介した後。
3	まとめ	・次時の予告	・第三段落を読むことを明示

際、ポイントとなる部分で課題を提示し、後半の研究作業に必然性を持たせるようにした。参考のために、第二時の略案のみ掲載させていただく。

読解学習中に提示する課題は、前述の生徒の感想に、指導者の思惑を加えて作成したもので、次の五点である。

① この村は平凡な農村に思えるのだが、なぜこの村が理想郷と言えるのか。
② なぜ村人はこの村の所在を外部の人に知られたがらないのか。
③ なぜ漁人は村人との約束を破ったのか。さらに再び村へ行けなかったのはなぜか。
④ 「太守」と「劉子驥」との違いはどこか。
⑤ 作者はこの文章で何を主張しようとしているのか。

これらの課題は教材からだけでも考察できる内容であるかも知れない。しかしそれはあくまでも推測に基づいた考察結果になり、頭書の目標は達成できない。従って生徒には図書館で文献を調べ確実な根拠に基づいた考察を行うよう指示した。

後半は、前半で提示された課題の解決を図るグループ別作業学習（二時間）である。指導目標②～⑤の達成を目指す。

グループは各クラス九グループ（一グループ五人）の男女混成グループで、一年間の観察をもとに編成、各グループに一人はリーダーとなり得る生徒、一人は「無気力」な生徒を必ず配置するようにした。

この学習に入る前に、一クラスを動員し、図書館で研究に使えそうな文献を収集・整理させた（図書館の一コーナーを提供していただいた）。適宜アドバイスを与えながら一時間、約六〇冊が集まった。

研究に際しては、『研究の手引』を指導者で作成・配付し、研究がスムーズに、かつ効率的に進むよう配慮した。（次頁参照）。研究初学者に対しては、できるだけ丁寧なサポートが必要であると考える。実際はこの手引でも不完全であるかもしれないが、逆にあまりにも細かな指示を与えると、その指示に束縛され、自由な思考が規制されてしまう。難しいところであるといつも感じている。

今回の研究作業を通して養うべき学力として、以下五点があげられている。

① 文献探索力。多くの文献から、自分の目的にあった一冊を選び出す作業を通して。
② 論理的文章の読解力。文献の中から自分が必要とする情報を的確に読み取る作業を通して。
③ 古典文の読解力。「読解力」とまでは言えないかも知れないが、陶潛の他の作品や、諸子百家の思想、および『徒然草』や『方丈記』を目的に応じて解釈・使用する作業

研究の手引

・出された五つの課題について、以下の方法で研究をすすめてみよう。なお、別の方法が考えられる場合には積極的に挑んでみよう。

課題の処理に入る前に、総合的に①「時代」と②「作者」について調べてみよう。

①「時代」について

・時代は「東晉」。それ以前にはどのような国があったか。
・当時の社会について調べる。
・「避難時乱」とあったが、「秦」から「東晉」までにどのような「乱ー戦争」があったか。
・その当時の人々の生活はどのようなものであったか。戦争時の生活について不明の時は、時代は違うが杜甫の作品にいいのがあるんだよ。でも出来る限り自分で努力してみること。

②「作者」について

・むしろ詩人として有名。この人のポリシーが表現されているような作品がみつかればベスト。詩人の略歴などは「総記」でもわかる。
・彼は当時の世相をどのように感じていたか。
・彼は戦争をどのように感じていたか。
・彼は人間いかに生きるべきと考えていたか。
・彼の思想をまとめると・・・老荘思想との関連
　日本の西行・鴨長明との類似点など

以上の考察をもとに、課題をひとつひとつ検討してみよう。実はすべての課題が関連しあっている。順序はどうでもいいので、各グループで工夫すること。

次の時間は、教室で、各グループの代表者による「徹底討論　『桃花源記』はこう読め！」を実施しますので、各グループの代表者を決めておくように。なお、考察結果は討論会の前々日までに清書して提出してください。

を通して。

④ 論理的表現力。論理的思考力を働かせ考察した結果を文章にする作業を通して。

⑤ 語彙力。言うまでもなく教科書以外の文献を読解する作業を通して。

四　実際の研究成果

準備された課題に対して生徒がいかなる考察結果を導き出せたか、以下、提出されたレポートの中から抜粋して紹介する。なお、各課題の冒頭の囲み内の文章は、指導者であるわたくしの意見であり、後の＊は講評である。

課題①に対して

この村を単なる平和な農村としか感じられないのは、我々読者が平和な社会に生活しているからである。文中にもある通り当時は常に戦乱が生じている世の中であった。その中にあっては平凡が非凡なことであり、人々にとってはこのような単調さ（現代の高校生から見れば退屈な生活そのものかもしれないが）こそが、まさに理想だったのである。町ではなく農村を舞台としている点については、作者の思想が深く関わっている。田園詩人とも呼ばれる彼は老荘思想との関連を強く持つ。であれば理想郷の舞台が農村であるのは必然のことと言える。

A　平和な故郷のたたずまい、犬と鶏の鳴く情景。これは単なる実景描写ではなく、陶潜にとって何のいさかいもないユートピアの象徴なのである。薄汚い俗世間と決別して帰って来た陶潜を迎えた世界、それは村人たちが静かに平和に暮らしている穏やかな田園であった。犬と鶏については、老子の理想世界を描いた『小国寡民』に基づく。

＊表現・内容は適当であるが、文献からの書き写しをつなげたものという感は否めない。読み取った内容を自分なりに消化し、表現することも必要である。「老子の理想世界」についての具体的な説明もぜひ欲しい。

B　作者は若い時から世俗の風習に適さなかったので、役人生活というものは窮屈なかごの中のような不自由なものであった。だから「少きときより俗に適う韻無く、性本もと邱山を愛す」（『田園の居に帰る』より）といっていて、自然山水を愛する性格を備えていたことがわかり、彼にとって平和で自由な農村は不自由な役人生活と比べて理想的であったことがわかる。

＊思想について触れていない点に不満はあるが、参考資料を自分達の言葉で的確に用いている点は大いに評価できよう。

C　当時中国は相次ぐ戦乱で混とんと入り乱れていた。そんな状況の中で作者は『桃花源記』に出てくるような平和なところで暮らしたいと思っていたに違いない。また、作者の書いた『田園の居に帰る』という詩からは、生まれつき丘や山の自然を愛していて、役人をやめた後は平和な農村で暮らしていたことがわかる。また、節を守り自然に帰るというのは老荘思想であったことがわかる。このようなことから、作者にとっての理想とは、この作品に出てくるような平和な農村のようなものであろうと推測できる。

＊表現的には稚拙な点も見られるが、豊富な研究内容をうまく文章にまとめ、説得力もある。そういう意味で、最も高く評価した意見である。

課題②に対して

村人は戦乱の世（世俗の世）を嫌い、この村を設立したわけである。人間である以上好奇心は否定できない。ゆえに漁人に外部の世界（俗世）について質問したわけであるが、その内容からあいも変わらぬ現実を知り（それは自分達の村が侵略される可能性も示唆する）、生活を守るために口外を禁じたのであろう。なお、この漁人は、その村に来た理由が全くの偶発的なことであり、その言動は欲とは無縁のものである。よって村人と同じ資質を備えていたと言える。

A　村人はおそらくこのような新しい土地があることを欲だらけの人間が知ってしまったら、彼らがこの土地を侵略してしまうのではないかと思ったのだろう。課題①で当時の中国は戦乱の世であったことがわかったが、村人はこの戦乱が自分達の平和な農村にまで及ぶことを恐れたのだと思う。

＊これが最も一般的な意見であった。わたくしの説もそうだが、推測が中心となる課題であるわけだが、課題①との関連を図ることにより、研究成果をうまく生かしている。

B　漁人の着いた村が作者の理想郷であるならば、村の住民の考えは作者の考えと一致すると考えられる。『帰去来辞』の一節に次のような文がある。「今の是にして昨の非なるを悟る」「富貴は吾が願いに非ず」。これより作者は、過去に自分が役人であったことは「非」であり「今」が「是」であること、一切の外的交渉を否定する無政府主義者であったことがわかる。だとすれば、村のことを干渉されたくないと思うのは当然である。

＊Aとは観点を変え、作者論的な立場から考察した結果である。論に無理なところも見受けられるが、その発想や目のつけどころについては大いに評価したい。

C　この疑問に、普通「漁人の話を聞いた人がその村を襲う、あるいは奪うことを、村人たちが恐れたため」と考

えそうであるが、僕達の班で調べた結果、そういう不心得な人々はその村に入れないことがわかった（根拠は課題③）。つまりこの村は襲われる危険性はないのだ。そうなると、単に村人が部外者を嫌っているのだろうと思うが、これもまた、村人が漁人を歓迎する様子を見れば違っていることがわかる。このことから、他者への口外の禁止は全く無意味になる。ではなぜか。そこで僕らの班はこう考えた。村人たちは興味をもった漁師と別れるのがつらい。できるならもう一度あいたい。そこで村にまた来れるための切符としてこのせりふを言ったのであろう。漁人が言ってしまえば無効、言わなければ有効という形の切符を。つまりこの言葉は村人が漁人を本当にこの村に来ることができる人物かどうかを試した言葉なのだ。

＊論理的文章としては稚拙であり、論にも飛躍がありすぎるため、陶潜の愛読者からは一笑にふされる内容であるかもしれない。しかし、研究過程で生じた疑問を基に人が納得しうる説を立てようとする意欲と態度は素晴らしい。教室内をなごやかにした説であるとともに、研究の面白さというものを実感させた説でもあった。

課題③に対して

課題②に関連しているが、今回の漁人の行動の契機は前回とは全く異なり、地位や財産に対する欲望が根底にあったと思われる。また太守の支配欲に裏付けされた行動でもある。ゆえに②で述べた「村人」としての資質は完全に否定されている。

A　漁人は村人に口外を禁止されたのに、太守にこの村のことを話した。これを聞いた太守は部下に命令してその村に行かせたのだが行けなかった。ここで、その村に行くまでの過程を見てみると、村に行けなかった理由には何か人間の欲がからんでいるように思える。漁人の方は太守に話をすることで何か見返りを期待しているし、太守はこの村を支配しようという姿勢が見られる。

＊最も多い意見である。

B　「忘路之遠近」という言葉から、一度目は意図的に村に着いたわけではないことがわかる。その時の漁人の心には欲を出す余裕はなかったと考えられる。しかし二度目は「詣太守、説如比」という言葉から、共謀して欲を満たそうとしていることがわかる。作者はこの村を神聖なものと考えて、欲のある人間には入ることができない地、また入らせたくない地と考えたから。

＊Aの説に作者の観点からの考察を加えたものである。もう少し、作者の欲に対する考え方についての具体的な説明がほしいが（ただしこのグループは課題①においてその点には言及している）、Aの意見よりは論理的説得力がある

と生徒たちには評価した。

C　「『桃』と『逃』は同音で『追い払う』の意に通じるから凶気を払う呪物として用いられるに至った」と『中国古代神話』に載っている。欲におぼれた漁人はこの村にとって災いとなる。よって村に行けなかった。

＊この意見が発表された時、教室内には溜息がもれた。今回の研究において、最大の発見である。この研究成果にはわたくしもただ感服するだけであった。

課題④に対して

ともに村を目指し、目的を果せずに終わる人物として登場してくる「太守」と「劉子驥」であるが、まず意図が異なる。太守の意図は権力を背景とした支配欲であると読み取るべきであり、それは村の性質と本質的に相入れないものである。一方、劉は「高尚士」という言葉で表現されているように、志が高く俗世間の欲望とは無縁の人物であり、村の性格と一致する。劉が「欣然」とした理由もここにあると思われる。その劉がなぜ村に行けなかったか。それは「できなかった」のではなく、「計画実行に至らなかった」と解したい。劉は作者自身が投影された人物のはずである。その彼が「できなかった」となると、それは作者自身の資質の否定につながってしまう。また彼が実在の人物であったことは、理想に具体性を持たせることになっている。

A　太守は③で調べたように非常に欲深い人物のように思われる。劉子驥は授業で学んだように志が高く俗世間での出世を求めないというところから、太守とは全く正反対であることがわかる。また劉子驥は、資料（大漢和辞典）を調べたところ、自然を愛し、資質を尊ぶという精神は、作者と共通していることがわかった。

＊二人の差についてはすべてのグループが「欲」にその原因を求めていた。したがってほとんどがこのような意見である。ただ、劉が実在の人物であったことは授業で述べていたものの、彼について資料で調べたグループはこの班のみであり、うまく作者との共通性を見いだしている。

B　この「太守」と「劉子驥」は誰かのたとえだと私達は考えました。そこですぐに思ったのが作者の祖父です。この祖父は太守で欲の深い人でした。この話に出て来る太守も欲深い人だったので、作者の祖父か欲深い人のたとえだとも思います。そして「劉子驥」は欲のない人だったので、作者自身か欲のない人でそうあってほしい人のたとえだと考えました。結論は欲があるかないかの違いということです。

＊論点が多少ずれており、説得力に欠けるような気がするが、祖父の件については大発見（ただし指導者側で確証は

取れなかった。参考資料があればお教え願いたい）であると評価した。

課題⑤に対して

> 本文に即して考えると、①戦争批判　②政治批判　③社会批判　④欲望の戒め　などが考えられるが、いずれにしてもこれらは俗世における事象であり、彼の描くところの理想郷においては全く無縁なものである。俗世への批判はそのまま田園生活の肯定につながり、それは言うまでもなく、作者の思想の逆説的な主張である。

A　理想郷とは、自然が美しく、老人も子供も楽しく暮らせる平和なところであり、こういった世の中を築くためには俗的な欲望を捨てなければならない。つまり、人々が無欲で、自然を愛していれば、老人も子供もこころから生活を楽しめる世の中になり、欲深い者が「支配」によって理想郷を築こうとしても、太守のように最後は迷って（失敗して）しまうということを主張しているのではないだろうか。また自分を劉子驥に投射しているのではないだろうか。

B　作者は誠実なために、今の中国の状態に苦悩していた。それゆえに平和を願う気持ちは人一倍強かったはずである。作者はこの話で、戦乱の中国がこの村のようになって欲しかったのだと思う。

C　今まで調べてきたことから、作者は老荘園思想のもとに、自然を愛し平和で静かな暮らしを望んでいる事がわかったが、裏を返せば、戦乱を嫌い、欲望に染まった世界を避けて通りたいということになる。実際作者は役人をやめた後、俗世間を離れ農村で暮らしている。そのようなことから、作者は戦争に反対していて、人間は欲望に染まってしまえば結局何も得られないのだと言っているように思える。

＊このようにすべて作者についての研究成果を踏まえて論述されていたことは評価したい。ただ、論の内容が「欲」と「平和」に限定されすぎた感は否めない。それらは具体的な一つの表れであり、それらを総合したところに作者の思想や思いを読み取らせたかったのであるが、研究初心者ということを考えればこれでよしとすべきか。

五　分析と評価

以上の学習内容について、指導目標ごとに分析と評価を行いたい。

・指導目標①について

前半の四時間の授業が中心となるが、レポートにおいて、作品内容を特に誤って解釈しているようなものはなく、正

確な読みはなされたと考えている。しかし、漢文読解力に「書き下し」や「句法」などという観点も含めてみると、学年末考査の結果から見て、他のクラスに劣ることはないものの、特に成長したという点も見られなかった。わずか一単元のみの試みで、かつ即効性は求めないが、こういう学習形態のなかにいかにしてドリル学習的要素を含めていくかも考えなければ、高いレベルでの目標達成にはほど遠いと言えるであろう。

・指導目標②について

これもすぐに力がつくとかそういう性格のものではないが、図書館の作業においては、生徒たちは一生懸命にページをめくり、解釈について話し合っていた。また、わたくしも多くの質問を受けた。これはまぎれもない事実であり、単に教科書のみを用いた教室での学習では見られないことである。こういった学習を続けることにより、必ず効果は上がるのではないかという期待を抱かせた。しかし、それは逆に不安なことでもある。気付いた時には空しく時間だけが過ぎていたという危険性もはらんでいる。従っていかにして単元ごとの評価を行うかということは是非考えなければならないことである。

・指導目標③について

生徒のレポートの内容は大きく次の型に分かれた。

1. 文章すべてが文献からの引用であるもの。
2. 文章すべてを自分の創作でまとめたもの。
3. 自分たちの文章を基調としながら、その中に文献や作品の引用をまじえたもの。

わたくしの思惑としては、できるだけ3. の形態を取らせたかった。それにより、読解は緻密になり、論理的表現の方法を効率的に学ばせることができると考えたからである。しかし、実際はその形態を取ったグループは約半数にとどまった。考えて見れば論理的表現にはほとんど不慣れな生徒たちである。プリント一枚配付しただけで、後は口頭での指導で済まそうとしたわたくしが不親切すぎた。学習者に高度な言語作業を求めた以上、指導者としてもそれに応じた懇切丁寧な指導を、例えば「てびき」などによって行うべきであったと反省している。

・指導目標④について

これは「出会わせる」という次元においては成功したと考えている。レポートの中では、日常生活では用いられないような語句が、数多く、誤用なく用いられていた。しかし応用力となるとどうか。先程の指導目標②の反省と同じことが言えよう。

・指導目標⑤について

根拠や具体例を確実に押さえることにより作品を深く研究する、という学習形態であった。作品研究の態度・方法はこの単元のみで学べるものではない。さらに様々な作品について研究する中で、普遍的な方法と応用力を身につけてくれればいいと考えている。従って、今後もこういう学習

を続けることを前提として、生徒たちを大いに評価してやりたい。また、それにより、人生を切り開く方法も学ぶことになると信じている。

六　おわりに

授業時数減少の動きの中で、いかにして学力の維持・増進を図るかというテーマのもとでの拙い試みを述べて来たが、現実の受験システムにおいてこのような行き型が受け入れられるのか、非常に不安である。しかしながら、まさに今、人生一度きりの高校生活を送っている生徒たちは確実に存在し、かつ、彼らはこの事態の中で受験を迎えようとしているのである。今後は別の生き方をも含め、試行即実践という緊張感と責任感をもち続け、研究を続けていきたい。

（鹿児島県立出水高等学校）